

は　じ　め　に

200 海里時代 3 年目を迎え日本の水産は曲り角にきた感がある。すなわち53年のわが国漁業生産量は 1,097 万トンの史上最高を記録したが、前年に対し僅か 2 % の伸びにとどまった。

漁場の縮少に加え、エネルギーの不足及び高騰を迎え、水産業者はまさに一大転^機に立たされている。

今後の漁業は好むと好まざるとにかかわらず遠海より近海に活路を求めざるを得ず、沿岸における漁場の効率的利用と増養殖の開発によって、資源維持を図かりながら生産をあげる方向に転換すべき秋にきている。

そのためには緻密な研究と厳しい管理体制が要求されるが、その何れも極めて難かしく、増大する一方の行政需要に対し、目下の研究体制は余りにも弱体で、このままの状態が続けば研究職員の資質低下に拍車をかけることになり、これからの本県水産業への対応は寒心に堪えない。識者善処を望むと共に自戒発奮するや切なるものがある。

昭和 54 年 9 月

青森県水産試験場長

馬 場 勝 彦